

〈小学校 国語科〉

主体的に表現する力を育てる学習指導のあり方

— 2年教材「こんなお話を考えたよ」の作文指導を中心に —

糸満市立喜屋武小学校教諭 上 原 千 秋

目 次

I 研究テーマ設定の理由	21
II 研究仮説	21
III 研究の全体構想図	22
IV 研究内容	23
1 主体的学習について	23
2 表現について	23
3 国語科における表現力の育成	23
(1) 指導方法の工夫・改善	23
(2) 個々の能力を伸ばす評価	24
(3) 児童の思い・願いを共感的に受容する教師	25
(4) 自由に表現しあえる学級	25
V 授業実践	26
1 単元名、教材名	26
2 単元設定の理由	26
3 単元の指導目標	26
4 単元の指導計画	26
5 評価計画	27
6 本時の学習計画	28
7 授業の考察	29
VI 研究の成果と今後の課題	30
1 成 果	30
2 課 題	30

主体的に表現する力を育てる学習指導のあり方

— 2年教材「こんなお話を考えたよ」の作文指導を中心に —

糸満市立喜屋武小学校教諭 上 原 千 秋

I 研究テーマ設定の理由

生涯学習社会・国際化社会・情報化社会等の時代といわれる現在、自己表現力の育成についても社会の要請は強調された。学習指導要領の総則の中に「これからの社会において、主体的に生きていくために必要な資質を養う観点に立ち、学校教育の現状や児童の実態等を考慮し、豊かな心を持ち、たくましく生きる人間の育成を図ることを重視することとした」とある。実際に、児童を取り巻く社会は、様々な情報が溢れている。情報は一方的に発信されているため、児童は、常に受け身の立場になることが多い。また、情報機器の便利さに慣れ親しんでいるため、児童は自分の言葉で考え、想像・表現することを面倒がる傾向がある。

これらのことを踏まえて、今後の教育は、自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応して生きていくために進んで新しい課題を見つけ、思考力・判断力・表現力等を働かせ、それを解決したり、創造したりする資質や能力の育成を目指していかなければならない。

このような教育を実現するために、今、国語科において求められているのは、単に教科書教材の知識を詰め込む教師中心型の指導形態ではなく、児童の主体的な学習活動の展開である。すなわち、言語を通して主体的に思考し、表現し、創造する力を育てるために、言語に関心を持たせ、基礎的な言語力を高めることが大切である。児童一人ひとりが自ら考え、表現するような興味・関心や個性等に応じた指導について配慮することである。その中でも特に作文の表現力が強調され、四年生以下が 105時間、五・六年生は70時間を充てるようにと具体的に示された。

2年生では、見聞したこと、経験した事等について順序を整理して文章を書くことが、作文の重点目標となっている。また、配慮事項として、自然や社会に関する指導との関連を図り、指導の効果を高めるようにと学習指導要領に示されている。

私のこれまで行った作文指導において「何を書いていいのかわからない」「書き方がわからない」「めんどくさい」等のつぶやきが聞かれた。そして、実際に書かせてみると、事象だけの羅列になり自分の気持ちを表現できない児童が見られる。それは、本来児童一人ひとりが持っている表現意欲を損なったり、個々のよさを見つけ、個に対応する十分な指導ができなかったりしたためと考える。

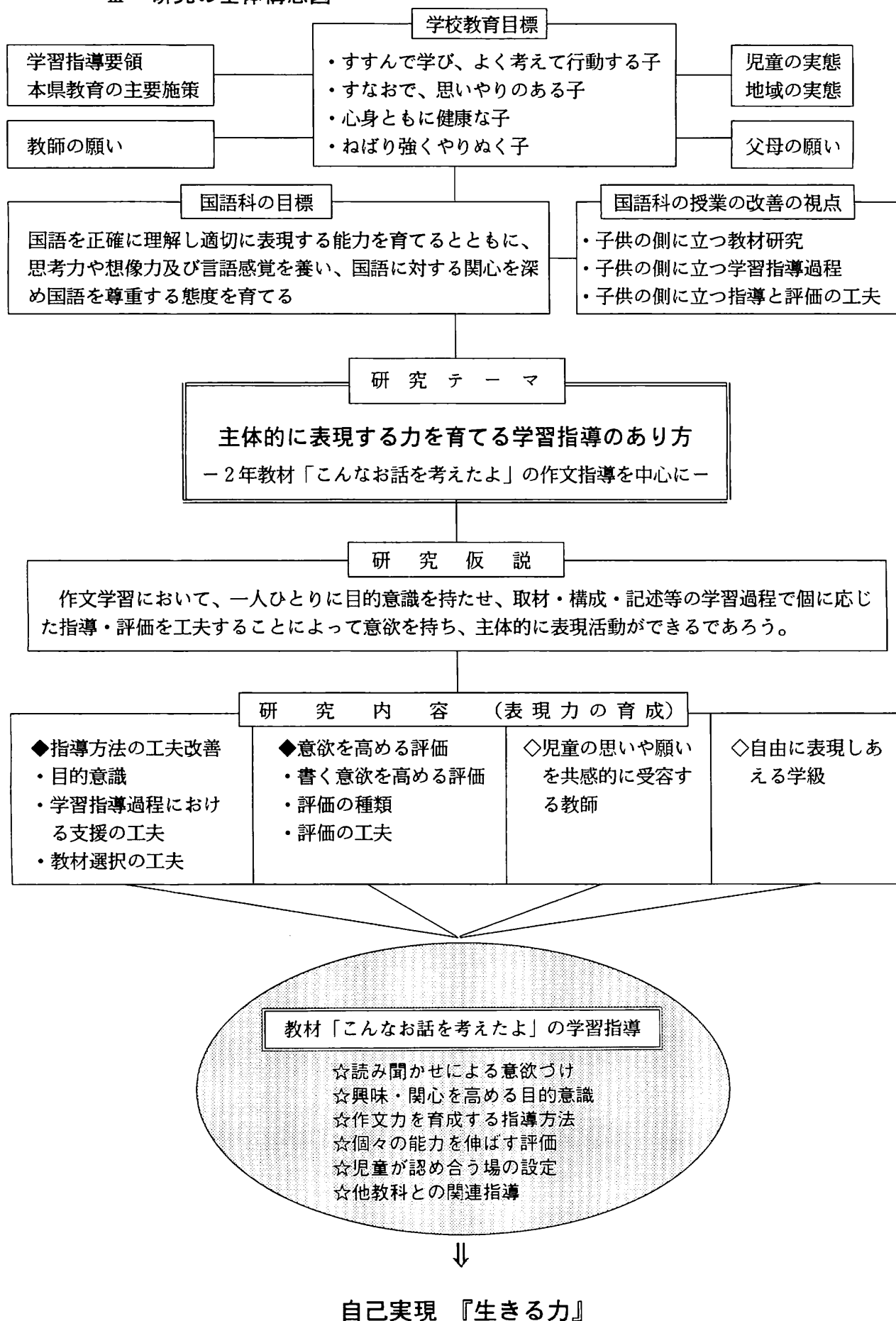
そこで、『こんなお話を考えたよ』という表現指導を主とする教材を取り扱う事前に、児童一人ひとりの表現意欲を高めることにもつながると考え、図書館利用時や帰りの会で個々の好きな本を紹介してきた。

また、理解指導を主とする教材との関連を図ることで、児童に表現能力をつけるようにした。その表現意欲・能力を基盤とし、児童一人ひとりの創造性を生かした絵本作りの指導を工夫することによって、主体的に表現する力が育つのではないかと考え、本テーマを設定した。

II 研究仮説

作文指導において、一人ひとりに目的意識を持たせ、取材・構成・記述等の学習過程で、個に応じた指導・評価を工夫することによって、意欲を持ち主体的に表現活動ができるであろう。

Ⅲ 研究の全体構想図



IV 研究内容

1 主体的学習について

児童は、「主体性・創造性・探求心・統合発展性」といった要素を持っている。しかし、これまでは、「教えてもらう」式の受動的な学習形態が多く取られてきたために、「求めていく」学習形態が十分に確立できていなかったように思われる。

主体的学習をするには、児童一人ひとりが自分の言葉で考え、判断し、表現することの楽しさや成就感を味わうことができるとともに、表現の能力や技能をつけることが必要とされる。

さらに、児童が主体的に学習するという意欲を持つことによって、自分の「個性」・「よさ」を自分の言葉で生き生きと表現・発揮しながら、基礎的・基本的な内容を自己実現に役立つ資質、能力として身につけていく。

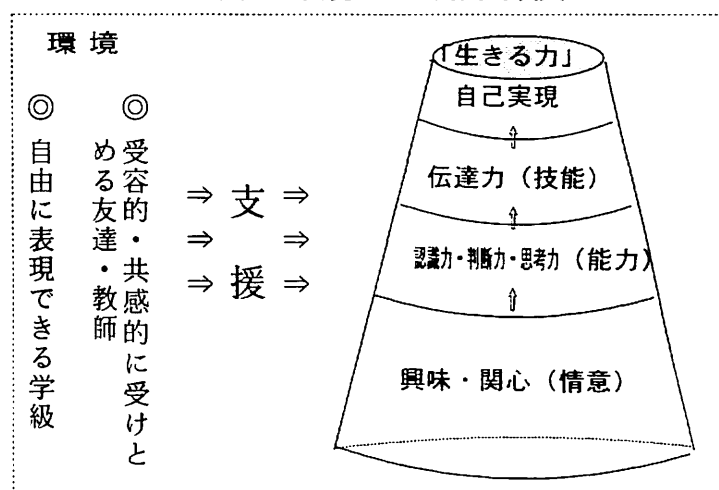
2 表現について

表現とは「心理的、感情的、精神的等の内面的なものを外的、感性的形象として客観化すること」（大辞泉）とある。

児童の表現力を育成するために、児童の内面にある思いや願い等を外に出そうとする意欲や態度を、奮い立たせる支援が必要である。

一般的な表現方法として図形・音楽・身体・造形・記号・言語等があげられる。国語科においては、その中でも特に、言語が大きなウェートを占めている。田近洵一は、「ことばを学ぶことは、人間として自立することだ。ひとはことばで自己を語り、ことばでひと（他者）とかかわる。」と述べている。児童が自ら考え、判断し言葉を通して表現できる創造的な力の育成を図ることができるためには、次のようなことを重視して指導していきたい。

図1 表現に至る内面的成長



3 国語科における表現力の育成

国語科の指導では、児童一人ひとりの表現能力を生かしながら、児童の興味・関心・意欲を大切にしながら作文指導をすることが大切である。そのために、次のようなことを重視して指導していきたい。

(1) 指導方法の工夫・改善

① 目的意識を持たせる

「書こう」「書きたい」という児童が本来もっている要素を引き出す指導において、児童一人ひとりに書く目的をもたせる必要性がある。

普段の生活の中で、文章を書くときは、相手があり、文章を書く目的がはっきりしている。しかし、これまでの作文学習の中では、取り上げられることが少なかったのではないだろうか。そこで、児童に「だれに・なにを・どのように伝えたい」という目的意識を持たせることによって、児童の表現したいというエネルギーを活性化することができる。また、学習計画を立てることによって、より見通しをもった主体的な学習活動が展開される。

② 学習指導過程における支援の工夫

低学年の段階では、態度や意欲を育てることに中心をおき、最も基本的な「文」や「文章」を書く力（取材・記述）指導に力点が置かれている。また、作文指導の中核をなす構想指導については、3年生以上になっている。2年生の「順序を整理して書くこと」等は、低学年の段階での構想につながるものである。

これらのことをふまえて、「個を生かす教育」の充実のために学習指導過程・学習形態を表1のようにまとめた。

表1 作文の指導過程

指導過程	指導内容	学習形態
取材	・必要なお話カードを選ぶ。 ・手引き「おおきいみかんよ」の活用。	一斉指導・個別指導 ↓
構成	・お話カードの順序を決める。 ・場面毎に粗筋を書く。・中心となる場面を決める。	↓ T・T
記述	・手引き「おおきいみかんよ」の活用。・付け加えカードの活用。 ・詳しく書かせるための取り立て指導「赤いふでばこ」。	↓ T・T
推敲	・一斉指導（つなぎ言葉の活用）。 ・教材文の活用（自分の作文を見直す）。	↓

一斉指導、個別指導、T・T指導などを適切に行い、さらに指導方法の改善を行う必要がある。

③ 教材選択の工夫

作文教材は教師が「どのような力」をつけたいのかということを念頭におき、選択していかなければならない。この場合「力」とは、文字力・語彙力・基本文型・表記力・取材の仕方・叙述の仕方等のことである。指導する際には、児童の実態と合わせながら、これまで体験したことの思い出し作文や、共通体験を生かした作文、学校行事作文、具体物や絵を見て文にする等様々な教材が考えられる。

その中でも、絵を見て文章を書くことについて、倉沢英吉は、次のようにあげている。

- イ 全員に同時に、同一教材として与えることができ、指導の目的や児童の能力に合わせて、共通経験を意図的に構成することができる。
- ロ 絵を詳しく見て書き、中心となる人物やものを説明したり、書いたりして、なにをどう文に記述するかを具体的に学ぶことができる。
- ハ 絵を見て文章を書くことによって、創造力を豊かにすることができる。
- 例えば、絵に表現できない音声・会話・心持ちを想像させたり、絵の前後の場面を想像して文章を書かせたりすることによって、自由創造的な文章を書く力を育てることもできる。
- ニ 何枚かの続き絵を利用することによって、話の粗筋を考えたり、文章の構成力の基礎を培うことができる。
- ホ 間接的ではあるが、経験の一部を絵によって、固定させ、具体的に示すことができるので、中位以下の児童でも容易に文章にすることができる。

このような利点を生かすために、教師は「絵そのものの分析・指導助言・学習目標（どのような力をつけたいのか）」の三点を明らかにして、教材を選択し学習活動を構成しなければならない。

(2) 個々の能力を伸ばす評価

平成9年11月に行ったアンケート調査の結果、作文学習の嫌いな児童は25％に達している。このような児童に対して、「作文学習は楽しい。もっと続けたい。」と感じさせることが大切である。そのためには、児童一人ひとりの伸びや頑張りを積極的に評価する必要がある。

① 書く意欲を高める評価

これまでの指導は児童の側に立ったものとは言えない面があった。児童が何につまずき、何を改善すべきか、また何が優れ、伸ばしていくかなどが明確でなかった。これらの課題や指導のねらいに対する児童の変容を細かく評価することによって書く意欲が高まっていく。

② 評価の種類

学習指導過程に沿って学習前の評価（診断的評価）、学習中における評価（形成的評価）、学習後における評価（総括的評価）を計画的に位置付けることが大切であると「鹿児島県総合教育センター研究紀要79号」に記されている。そこで作文指導における評価を次のように捉える。

V 授業実践

1 単元名 絵本を作ろう（作文）

教材名 「こんなお話を考えたよ」（光村図書 二下）

2 単元設定の理由

(1) 教材観

低学年の実態として、児童は自由に想像して話を作ることを好み楽しんでいる。けれども、全くないところから想像することに抵抗を感じる児童も何人かいる。

この教材では、一人ひとりの児童が、四枚の絵を見て、自分なりのお話の構想を考えながらそれぞれ絵を選択していく。この過程では、豊かな想像力と個性的な思考力の基礎が培われていく。また、絵の順番を並べ変えることによってお話の構成を考えていく過程では、順序を整理して文章を書く能力を高めることができる。そこで、登場するわにたちの会話等を考えていく中で、思いやりの心を育てていくこともできるであろう。

さらに、お話を記述していく過程では、お話の構成を考えながら、語と語や文と文との続き方に注意して文章を書く能力を育てることができる教材である。

又、画用紙に清書した作文と絵を二つ折りにして出来上がった「わたしの絵本」。表紙を書き完成すると、作文を書いている時点とは違った満足感を覚える。そのことが、これ以後の作文学習において、効果的な処理の仕方を求める一要因になるのではないかと考える。

(2) 児童観（省略）

(3) 指導観（省略）

3 単元の指導目標

(1) 価値目標

人物の性格や行動を考え、色々な行動をさせることによって思いやりの心や考えを広げることができる。

(2) 観点別指導目標

【関心・意欲・態度】

絵を並べてお話を作るという活動を楽しみ、進んでお話の絵本を作ろうとする。

【表現の能力】

教科書の絵をもとに書こうとする話の筋を押さえ、人物の行動や周りの様子を書いて進んでお話を作ることができる。

【言語】

順序を表す語句の働きを理解し、適切に使うことができる。

4 単元の指導計画（12時間）

次	ね ら い	主な学習内容及び活動	時間	評 価 計 画
第 一 次	◎ 単元について話し合い、学習の目標を持つことができる。	① 単元名や教材名等から学習の目標について考える。	1	〔関心・意欲・態度〕 単元名や教材名等から、学習の目標を知り、計画を立てることができる。 〔言語〕 正しく新出漢字が書けるよう練習できる。
第 二 次	◎ お話を書く意欲を持つことができる。	① 四枚の絵を見て話し合う。	1	〔関心・意欲・態度〕 四枚の絵を見て話し合い、お話を書こうとする意欲をもつことができる。
（ 本 時 ）	◎ 自分の選んだ絵の順序を考え、表現を工夫してお話を書くことができる。	① 自分が書いてみたいお話を考えながら好きな絵を選び、順序を決める。	1	〔関心・意欲・態度〕 書きたいお話の粗筋を考えて、好きな絵を選ぶことができる。

5 — 12 第 三 次	② 表現を工夫して、お話を考える。(取材)	3	〔表現〕 会話や様子を表す言葉等をみんなに分かってもらえるように詳しく書こうとする。
	③ 表現を工夫して、お話を考える。(取材・まとめ)		〔言語〕 順序を表す語句を使うことができる。
	④ “ (まとめ)		
	⑤ 作文例の表現の工夫を読み取る。	1	〔表現〕 渋谷さんの作文から会話の使い方や様子を詳しくする言葉等の表現のよさにきづくことができる。
	⑥ 読み取った表現の工夫をワークシートにまとめる。	1	〔言語〕 渋谷さんの表現の工夫をワークシートにまとめることができる。

5 評価計画

評価場面	具体的評価目標	十分満足できる(A)	おおむね満足できる(B)	満足できない(C)
1次(1) 単元名や教材名等から学習の目標について考える場面 (発言、観察)	関①単元名や教材名等から、学習の目標を知り、計画を立てることができる。	・単元名や教材名から学習目標を知り、学習計画について考え発言することができる。	・友達の発表を聞いて、学習計画について考え、書くことができる。	・学習計画を立てることができない。
2次(2) 四枚の絵を見て話し合う場面。 (観察・つぶやき)	関②四枚絵を見て話し合い、お話を書こうとする意欲を持つことができる	・熱心に絵を見て、学習の見通しをもち、気づいたことを発言している。	・絵を見て自分なりの見通しをもち、気づいたことを、発言している。	・集中して絵を見ず、気づいたことを発表しない。
3次(1) 書きたいお話の粗筋を考えて好きな絵を選ぶ場面。 (発表、チェックリスト)	関③書きたいお話の粗筋を考えて、好きな絵を選ぶことができる。	・四枚の絵を見比べながらお話の粗筋を想像し、必要な絵を選ぶことができる。	・友達の発表を聞いて粗筋が作れ、何枚か絵を選ぶことができる。	・お話の粗筋を考えることができず、絵を選べない。
3次(2)(3)(4) 粗筋カードをもとに、表現を工夫しお話を書く場面 (作文・作文を書いている様子)	表④会話や様子を表す言葉等をみんなに分かってもらえるように、詳しく書こうとする。	・会話や様子を表す言葉を工夫して話がよく分かるように書くことができる。	・話がよく分かるように詳しく書くことができる。	・お話を詳しく書くことができない。
	言⑤順序を表す語句を使うことができる。	・文章のまとまりを考えて、つなぎ言葉を使うことができる。	・場面ごとに、つなぎ言葉を使うことができる。	・つなぎ言葉を使うことができない。

6 本時の学習指導計画

(1) 主題名 絵本を作ろう

(2) 本時の指導目標

表現を工夫して、お話を考えることができる。

(3) 授業の仮説

取材・構成・記述の段階で取り立て指導をしたり、手引きを示したりすることによって、作文を詳しく書く方法が分かり、主体的に表現活動ができるであろう。

(4) 準備する物

目標カード、手引き①、赤い筆箱（2種類）、付け加えカード、ワークシート

(5) 展 開

過程 (時間)	学 習 活 動	教 師 の 支 援	評 価
つ か む (5)	1 前時の学習を振り返る。 2 本時のめあてを確認する	1 手引き①『おおきいみかんよ』を掲示し、確認させる 2 めあてを掲示し、全員で音読させる。	
	お話をくわしくかきましょう		
深 め る (38)	3 例を取り上げ、詳しく書く方法を知る。	3 『赤いふでばこ』の事例について話し合い、詳しく書く方法を理解させる。 ・「赤いふでばこです。」と掲示する。 ・2種類の筆箱を見せて、違いについて発表させる。 ・児童の発表を付け加えカードに書き、詳しくする方法を知らせる。	
ま と め る (2)	4 お話を詳しく書く。	4 机間巡視をして、個別指導をする。 ・粗筋カードをもとに書かせる。 ・手引き①を参考にさせながら、付け加えさせる。 ・手引き①の中で使っていない色はないか考えさせる。	・詳しく書くことができたか。【表現】 - A: 会話や様子を表す言葉を工夫して、話がよく分かるように書くことができる。 - B: 話がよく分かるように書く事ができる。 - C: お話を書く事ができない。
	5 お話を発表する。	5 二・三名発表させる。 ・机間巡視中にチェックする。	
	6 次時予告を知る。	6 お話をまとめることを知らせる。	

(6) 授業の反省

ア 手引き「おおきなみかんよ」を活用したために、「バシャ、バシャ。」「ドブン」等の音や会話を多く取り入れ、様子や気持ちがよく分かる文や文章を書く児童が増えた。

本時の学習において、評価基準がAの児童が9名、Bの児童が7名、Cの児童が1名であった。Cの児童に対しては、個別に関わった。教師がおたずねの文を書いてあげ、それに答えるよう書かせたら、一生懸命自分なりの言葉で、さっさと書くようになり、文章に膨らみが出てきた。

イ 付け加えカードを七色使った。児童には使うカードを選びにくかったようであった。そこで、色分けはしないで、付け加えカードを一種類だけ使用させた方が、楽に学習活動が行えたのではないかと思う。

7 授業の考察

「何を書いているかわからない」「書き方がわからない」児童の実態に対して、取材・まとめ等の段階で取り立て指導をしたり手引き「おおきいみかんよ」を示したりすることで、作文を詳しく書く方法が分かり、活用しようとする積極的な学習態度がうかがえ、膨らみのある文章を書くことができた。学習前は作文学習が苦手と答えたMTやMKが、手引きをもとにお話作りを進んで取り組んでいた。学習態度にむらのあるOSも付け加えカードや手引きを使うことによって、積極的な学習態度で作品を楽しく仕上げる事ができた。

表3 観点別評価

A (十分できている)
B (おおむねできている)
C (満足できない)

(授業前)			(授業後)	
児童名	関心意欲態度	表現	関心意欲態度	表現
N T	B	B	A	B
T K	B	B	A	B

作文学習に対する意欲を授業前・後で比べると、CからBになったのが3名、Aになったのが1名、BからAになったのが8名、表現においても10名の児童の評価が高まった。このように指導方法を工夫しながら、学習状況チェック表や児童作文の点検を行うことによって、児童のつまづき等に対して適切な支援が行えた。具体的に、教師が付け加えカードを使用させたり、補足して欲しい事について、おたずねの文を書いて文章を膨らませたり、T・T指導等があげられる。そうすることによって、児童はそれぞれの能力にあったお話作りを進めることができた。

また、普段の日記や作文、学習状況チェック表や自己評価表等で、児童の実態を把握することによって効果的な指導ができ、次時の学習活

また、相互評価として、12時間目の絵本貸し借り会で友達から「〇〇君の1の場面面白かったよ。」「△△さんのお話もっとよみたいなあ。」等、感想カード(図3)をもらうと、どの子も作品が認められ嬉しそうであった。

授業後のアンケートでは、「こんなお話を考えたよ」の学習は「とても楽しかった」と答えた児童が80%、「楽しかった」と答えた児童が10%であった。また、「作文の時間が好きか」の質問には、「はい」が68%「ふつう」が26%合わせて94%で11月のアンケート結果より19%増えている。このことから、作文に対する意識が少しずつではあるが変容しているといえる。

表3 観点別評価

A (十分できている)

B (おおむねできている)

C (満足できない)

(授業前)		(授業後)		
児童名	関心意欲態度	表現	関心意欲態度	表現
NT	B	B	A	B
TK	B	B	A	B
OS	B	B	A	A
AY	B	B	B	B
MT	C	C	B	B
MK	C	C	B	B
EN	B	B	(欠席)	
IT	A	B	A	A
TK	B	B	A	A
NY	B	B	A	B
SM	B	C	B	A
HA	B	B	B	A
YM	A	B	A	A
NK	C	B	A	B
NN	B	A	A	A
JS	B	B	A	B
NS	C	B	B	A
MS	B	A	A	A
OM	C	C	B	B

図2 (手引き①)

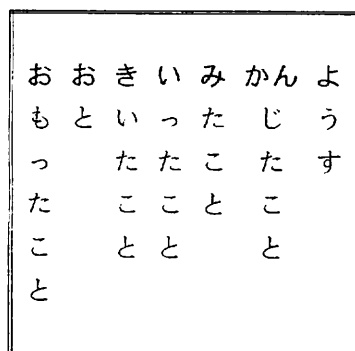
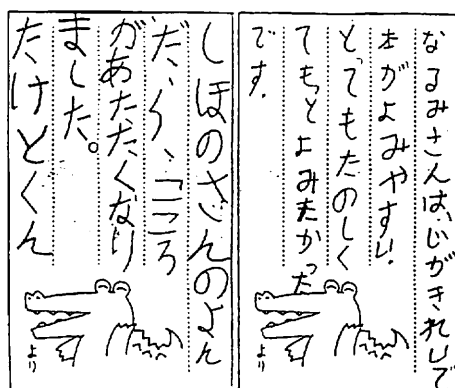


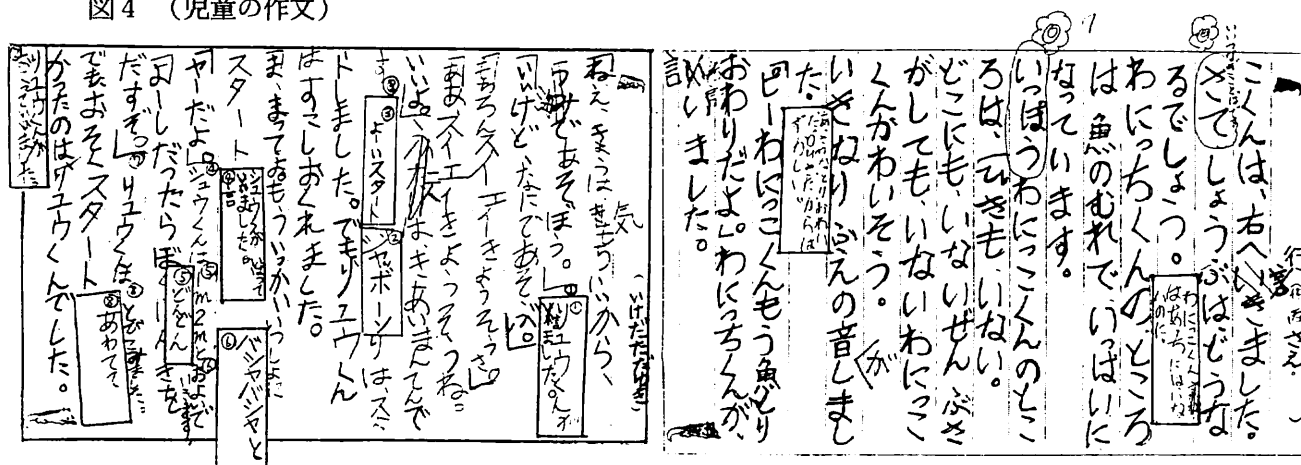
図3 (感想カード)



(授業の様子)



図4 (児童の作文)



VI 研究の成果と今後の課題

1 成果

- ・ 何を学習していくのか課題意識を持たせ、誰に読んで欲しいのかという目的意識を持たせたり、学習計画表を児童と作成し掲示したりすることによって、何を書くのかがはっきりし、意欲的に作文学習に取り組むようになった。
- ・ 毎時間の指導展開計画と評価計画を立てることにより、児童への支援がより計画的に行えた。
- ・ 絵をもとに取材・構成・記述指導を工夫したため、「何を書くか」「どんな順序で書くか」がはっきりし、作文を楽しんで書き進めることができた。
- ・ 好きな絵本を紹介したり、「スイミー」や「えいっ」等の物語文で使われている巧みな表現を参考にしたりすることで、児童の作文に広がりが見られた。
- ・ 「おおきいみかんよ」の手引き①の活用や、取り立て指導をしたことによって、児童は表現の仕方が分り、内容を膨らますことができた。(P29図2)
- ・ 図工と関連させながら書いた作文を絵本にさせることで、これまでの作文の学習とは違った成就感や充実感を味わわせることができた。
- ・ 児童は作品を読み合うことにより、相互に認め合い、成就感・充実感を味わい、「もっと作りたい」等の発表学習への意欲が見られた。(P29図3)

一連の学習過程を通して、児童は少しずつ作文技能が身につくと言えらる。そこで今後も児童が主体的に取り組める作文学習を、計画的に継続指導していきたい。

2 課題

- ・ 児童の表現意欲を喚起する教材開発。
- ・ 児童一人ひとりの思いや願いに、対応できるような指導・評価方法の工夫。(個別指導の充実)
- ・ 関連指導が意図的・計画的に行われるような年間指導計画への位置付け。

〈参考文献〉

文部省	『新しい学力観に立つ国語科の授業の工夫』	東洋館出版社	1995年
倉沢英吉	『作文の指導過程Ⅰ』	新光閣書店	1964年
中西一弘	『作文指導の方法(豊かに書く活動を生み出す工夫)』	光村図書	1992年
〃	『 〃 (作文教材の生かし方)』	〃	1988年
〃 樺島忠夫、宮地裕法	『作文指導の原理と方法』	〃	1976年
長崎県国語教育学会	『自己表現のある楽しい国語学習』	明治図書	1996年
小森茂、藤井治	『新しい学力観に立つ授業展開のポイント(国語科)』	東洋館出版社	1994年
甲斐睦朗、松川利広	『語彙指導の方法[語彙表編]』	光村図書	1996年
村上芳夫	『季刊 主体的学習(主体的学習はどういう学力を育てるか)』	明治図書	1975年